

第9次札幌市環境保全協議会

第4回会議

会 議 録

日 時：平成26年7月4日（金）午後2時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 14階 1号会議室

1. 開 会

○小林会長 ただいまより、第9次札幌市環境保全協議会の第4回会議を開催させていただきます。

まずは、事務局よりご報告をお願いします。

○事務局（高木環境計画課長） 環境計画課の高木です。よろしくお願いいたします。

事務局から、まずは委員の退任、就任についてご報告をさせていただきます。これまで委員として活動していただいております遠田雅宏委員から退任の届出がございました。遠田委員は、社団法人北海道建築士事務所協会札幌支部からのご推薦をいただいていた方でしたので、同協会から、後任委員として坂本昌司様のご推薦いただきまして、委員をお願いすることにいたしましたので、ご報告させていただきます。

次に、本日の委員の出席状況でございますが、今ご紹介させていただきました坂本委員、高畑委員のお2人から欠席のご連絡をいただいております。また、千葉委員におかれましては、会議の途中で退席される旨のご連絡をいただいております。

現時点で、18名中16名と委員の過半数の方にご出席いただいておりますことから、札幌市環境保全協議会規則第5条第3項の規定に基づき、本日の会議が成立していることをご報告させていただきます。

続きまして、配付資料の確認をさせていただきます。

—資料確認—

○小林会長 ありがとうございます。

2. 議 事

○小林会長 それでは、早速、議事を進めます。

今日の議題は、事前に環境配慮活動の実践への効果的な誘導についてご検討いただきたいということで、事務局からは、ご案内方々、ご連絡を差し上げております。このテーマに関連して、現在、札幌市では、新たな温暖化対策実行計画の策定を進めておりますので、まずは、事務局から内容などについてご報告いただきたいと思います。

○事務局（藤本環境計画課主査） 環境計画課の藤本と申します。

先ほどご紹介した資料の中で、参考資料としてお配りしております札幌市温暖化対策推進ビジョンの概要版をご覧いただきたいと思います。

小林会長からお話がありましたとおり、札幌市では、新しい温暖化対策の策定に向けて現在作業を進めておりますけれども、こちらのリーフレットは、現時点での温暖化対策の計画の概要版になっております。

まずは、こちらがどういう計画なのか、簡単にご紹介させていただきたいと思います。

右側のページに緑色の棒グラフがあります。

札幌市の温室効果ガスの排出状況で、京都議定書の基準年である1990年からこの計

画を策定した当時の最新の値である2007年の排出量までをグラフにしたものです。基準は1990年の934万トンから2007年までは1,208万トンで、右肩上がりに排出量が増加しているのがおわかりいただけるかと思います。その下には、部門別の排出量の内訳を示しており、札幌市と全国を比較しております。札幌市が上になります。赤枠で囲っている部分で、オレンジ色が民生家庭部門、水色が民生業務部門、緑色が運輸部門で、この3部門で排出量の9割ほどを占めております。全国の方は、ピンク色の35.9%というところで、産業部門が一番多く、このように特徴には差があります。札幌は、第3次産業が中心の産業構造であること、冬期間の暖房や給湯で、家庭のエネルギー消費量が高いということがありますので、排出の割合に大きな特徴が出ております。

最初にご紹介しました排出量が増加している主な原因は、下に書いておりますとおり、左から人口世帯数の大幅な増加や給湯、暖房によるエネルギー消費量が高いこと、生活に関する利便性の向上ということで、家電の大型化、多様化があり、1人1台がテレビを持っている状況になっておりまして、そういったことから増えていると考えられます。

こういった状況を踏まえ、この計画でどのぐらいの排出量を削減するかという目標です。左側のページを開いていただきまして、一番左端に目標値が記されております。地球温暖化対策に向けた目標と将来の姿と書いており、その下の囲みの中には、1990年比で、長期目標として2050年に温室効果ガス排出量を80%削減、中期目標として2020年に25%削減という目標を掲げております。

これを達成するための具体的な取り組みにつきましては、右側を開いていただくと10のアクションによるシナリオ展開と書いておりまして、中期目標を達成するために取り組んでいく施策を分類してまとめて書いております。

例を挙げますと、左上は北国基準の省エネルギー住宅の普及に向けた展開ということで、高气密、高断熱の住宅を普及させていく取り組みになります。その右隣は、高効率給湯・暖房機器の普及に向けた展開ということで、給湯、暖房によるエネルギーが高いという特徴がありますので、そこをターゲットとした施策になっております。

このように、取り組み分野が全部で10個ありまして、それに基づき温暖化対策を進めております。

計画の概要については、以上になります。

次に、平成25年度札幌市温暖化対策推進ビジョン進行管理報告書をご覧ください。

こちらは、温暖化対策推進ビジョンに基づき取り組んでいる内容の年度の取組をまとめた報告書になっております。

1ページの下にグラフがありまして、札幌市の温室効果ガス排出量を示しております。先ほど計画の概要版でご説明したものでは2007年度までの値しか入っておりませんが、こちらでは2010年から2012年までの値が入っております。右端の緑色の棒グラフが計画の中期目標で設定している701万トンですが、2010年は2007年の1,208万トンから大きく削減しまして、997万トンとなっております。主に、泊

原発3号機の稼働による影響が大きいのですが、その後はどんどん増えていっております。これは、3基稼働していた泊原発が順次止まっていったことがあり、排出量が大きく増えております。2012年では1,322万トンという値になっておりまして、排出量がかなり増えております。

次のページに移りますと、部門別の削減量が書いてあります。

ページの中ほどに削減量の内訳と囲みで書いてあるところがありますが、その下のカラーの帯グラフをご覧ください。

2012年度の削減量として部門別の値を色ごとに分けて示しております。民生家庭部門が青色になりまして、マイナス8とあり、排出量が増加しております。民生業務部門も同様に2万トン増えております。運輸部門は29万トンの削減が進み、ごみ、みどりも同様に6万トン、10万トンの削減が進みまして、各部門の合計で35万トンの削減が図られております。

右側に大きくオレンジ色のところがありまして、マイナス161と書いておりますけれども、こちらは、先ほどお話ししましたが、原発が止まり、排出量が増えている状況がありまして、それがここに出てきております。

このように、各部門の削減は少ししか進んでいないのですけれども、原発の稼働停止により、その分が打ち消される状況になっております。

3ページは、部門別の削減を細かに分析したのですが、こちらは割愛させていただきたいと思います。

4ページも各アクションの進捗や関連する事業の取り組み状況を示しておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

今簡単にお話ししましたとおり、現在の温暖化対策推進ビジョンに基づく取り組みをいろいろと進めているのですけれども、原発の影響がかなり大きく、実際には排出量がふえている状況がございます。そういったことを踏まえまして、参考資料をつけておりますが、策定する新しい計画はどのようなものにするかをまとめておりますので、そちらをご覧くださいいただけますでしょうか。

1ページの左側には、計画の策定の必要性・位置づけを示しております。

必要性につきましては、先ほどお話ししましたとおり、現在の計画に基づいて取組を進めておりますけれども、福島第一原発の事故を受け、エネルギー政策や温暖化対策の方向性が変わったり、原発が停止しましてCO₂が増えている状況を踏まえて新しい計画をつくる必要があると整理しております。また、計画の位置づけとしましては、札幌市の最上位の計画であるまちづくり戦略ビジョンが昨年度にできましたので、その内容を反映する形で現在策定を進めておりますエネルギービジョンというエネルギー計画と整合を図る形で今の計画を改定していこうと考えております。

右側に移っていただきまして、計画の基本的な方向性です。

①の基本的な考え方としましては、現行の計画をベースにしまして、以下の点を踏まえ

た計画としたいというものです。原発の稼働を前提としないこと、それに伴う温室効果ガス削減目標と達成に向けた施策を見直していくことを考えております。

削減目標の設定方針などにつきましては後ほどご覧ください。

ここでグラフに示しておりますのは、エネルギービジョンというエネルギーの計画に基づく取組を進めていきまして、目標が達成された場合にCO₂がどれくらい減るのかを試算したのになっております。この結果、2030年の値を見ていきますと、665万トンとなっております。こういった試算結果を踏まえまして、新しい目標の設定を考えていこうとしております。

次に、2ページに移っていただきたいと思っております。

現在の計画における課題と見直しの観点をまとめたものになりまして、特に、今回の協議事項と関連深いところについてお話しいたします。

左側の上から4番目に、環境配慮活動の実践率が横ばいとあります。こちらは、省エネ型のライフスタイルを定着させるため、普及啓発事業などによって対策を進めているのですが、実際には、環境配慮活動を実践していた人が定着しないでやめてしまった場合や、関心はある程度あるのですが、実践にまで至っていない方がいらっしゃるということがアンケート調査などでわかってきております。こういったことを踏まえまして、どういふうに実践へ誘導していったらいいかを、後ほど説明させていただきますが、皆様にご検討いただきたいと考えております。

例えば、それぞれのライフスタイルに対応する取り組み方法を提示するなど、対象を意識した情報発信を強化するなど、工夫した方法の働きかけが必要ではないかと考えております。

3ページにつきましては、計画の策定に関するスケジュールの概要になります。現在、環境保全協議会と並行しまして、環境審議会で計画の内容をご審議いただいております。このように、環境審議会や議会などで中身を確認していただき、パブリックコメントを実施しまして、今年度末の平成27年3月に計画を策定し、公表したいと考えております。

雑駁ですが、以上で説明を終わらせていただきます。

○小林会長 ただいまの説明にご質問はございませんでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○小林会長 たくさんおありと思っておりますけれども、時間があつたら細かいご質問をいただくことにして前に進んでいいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○小林会長 今ご説明がありましたように、市で策定する新たな温暖化対策実行計画にこの協議会で皆さんに出していただくアイデアを反映させたいということですので、よろしく願いいたします。

皆さんが生きている以上、全員が当事者です。全員がある消費活動をしてCO₂を出しておりますので、いろいろなアイデアを出していただき、ご説明がありましたように、ど

うしたら実践を一步進めることができるかについてご論議いただきたいと思います。

次に、環境配慮活動の実践への効果的な誘導について、ご説明をお願いします。

○事務局（藤本環境計画課主査） 引き続き、藤本からご説明させていただきます。

お配りしております資料1をご覧ください。環境配慮活動の実践への効果的な誘導と書いてあるものです。

先ほど、新しい計画をどういうふうに策定していくかを簡単にお話ししまして、その中でも触れておりますけれども、環境配慮活動の実践をどういうふうに誘導していけばいいかが一つのポイントになるかと考えております。

そこで、環境配慮活動の実践状況はどういうふうに分析できるかを「1」でまとめております。

まず、①の「無関心層」から「実践層」です。全く関心がない、かつ実践もしていない人で、下の図の中ではグレーの部分に相当する人たちにいきなり関心を持ってもらい、さらに実践してもらおうところまで引っ張っていくのはなかなか難しいものがあると考えられると思います。

次に、②の「中間層」から「実践層」です。下の図の青色の部分が中間層になりますが、関心はある、もしくは、ある程度はあるが、実践までは至っていない人がいるかと思えます。こういった人たちを実践層に導くためにはどうすればいいか、少しの後押しがあれば導くことができるのではないかと考えておまして、実践層を増やすためには、ここをターゲットとすることが想定できるのではないかと考えております。

また、③の「実践層」から「中間層」です。この流れも考えられます。実践層の方たちは、関心がある、もしくは、やや関心があり、取組を実践されている方たちを想定しておりますけれども、こういった方たちが実践をしなくなってしまう流れも考えられます。つまり、関心がそれほど高くない人たちは、取組の必要がなくなった場合はやらなくなってしまうことも考えられます。こういった人たちを実践層に定着させるためにはどういう働きかけをしていったらいいかです。

大きく二つの点につきまして、環境配慮活動に対する市民の意識を探るとオレンジ色で書いておりますけれども、そのためにどういうふうに働きかけたらいいかです。

そこで、「2」に移ります。

こちらは、環境配慮活動に対する市民の意識です。

隣に米印が書いておりますけれども、昨年度に実施しました市政世論調査の中で、エネルギーと地球温暖化対策について、幾つかアンケートをしております。対象は18歳以上の男女1,500人ですが、この結果を下の表にまとめております。

今回の環境配慮活動に実践する設問三つを挙げております。

例えば、設問（1）のエネルギーの無駄遣いをしてしまう理由で、回答の割合が高かったものを三つ挙げております。「細かく気にするのは面倒」が41.5%、「コスト増を気にしない」が13.6%、「資源はすぐに無くならない」が10.5%でした。

その右には、割合の高い層が記載されております。例えば、「細かく気にするのは面倒」と答えた方はどういう年代の人たちが高い割合で回答しているのかです。割合の高い層は18歳から39歳の方で、40歳手前ぐらいまでの方が多く回答しておりました。

こういう人たちを環境配慮活動の実践につなげていくにはどういう対策が考えられるかが右隣に書いてあります。細かく気にするのは面倒だということですので、そんなに気にしなくても簡単に実践できるような取り組みから始めてみる働きかけの仕方があってもいいのではないかと考えております。

同じように、ほかの設問でもどの割合が高かったのかを調べており、それを踏まえてどういふ対策ができるのかをこの表にまとめて示しております。

また、特徴的なものとしましては、(2)のどうすれば無駄遣いを改善できるかです。割合が一番高かったのは「メリットが分かれば」と回答した方で、22.3%いらっしゃいました。年代としましては、かなり幅広く、ほとんどの年代の方となっておりますので、取り組みをすることによって、どういった効果があるのかという対策が考えられます。当然、環境に対してのいい効果もありますし、コスト的なメリットもあるかと思えます。そういったものを何らかの形で明示していくことで取り組みの実践につなげていけるのではないかと考えられます。

また、(3)の環境配慮活動を実践する理由という設問で割合が一番高かったのは「光熱水費を削減するため」で、34%でした。先ほどの無駄遣いを改善する方法とかぶるところがありますけれども、コストメリットを伝えることで取り組みの実践につなげていけるのではないかと考えられます。

このように、ここで表にまとめたアンケート結果を参考にさせていただき、実践層をふやしたり、実践層に定着させるためにどういふ方法が考えられるかが「3」になります。

会議の前に委員の皆様にも事前にご検討いただきたいということで資料をお送りしまして、何名かの委員からご回答をいただきました。今回は、誰がやるのか、どういふうにやっていくのか、そのための予算はどうするのかということにとらわれず、自由にアイデアを出していただきたいと考えております。いろいろ出したいただいたアイデアを精査していく中で、実施者や予算などの話は検討していけばいいのではないかと考えております。

囲みの中にはテーマが書かれておりますが、この協議会の第1回会議で皆様にご確認いただきました協議テーマに基づいて設定しております。最初にご説明しました温暖化対策推進ビジョンで示している10のアクションのうち、次世代自動車の導入、公共交通機関の利用拡大、エコライフの定着・拡大、事業活動によるCO₂削減の三つに関連する情報提供や普及啓発の点についてご検討いただきたいと考えております。

今回ご検討いただいた手法につきましては、この後に内容の精査を進め、先ほど計画を策定中とご説明をしましたが、そちらに反映していくことを考えております。

その次に、資料2が事前に委員の皆様からご提案いただきました手法の一覧となっております。こちらにつきましては、後ほど委員の方からご説明をいただきたいと考えており

ます。

資料の説明は、以上になります。

○小林会長 ありがとうございます。

資料1、資料2を示していただきましたけれども、エネルギー消費量が大変増えております。ご存じのとおり、日本中でCO₂を出しているうちの半分は産業であります。主に製鉄業とセメント工業と発電の三つでほぼ半分なわけです。札幌市では、電力を使った分は入っておりますが、札幌市民が使っているセメント、コンクリート、鉄製品については、本来、自分たちも加担しているのですけれども、カウントされていないだけの話です。

また、飛行機についても丘珠空港での給油分しか入っておりませんので、新千歳空港やその他の分はい入っておりません。ですから、日本中での発生量のうち、本来、札幌市民がかぶらなければならない分がもう少しあるのだらうと思います。

しかし、自治体ごとのカウント上、それはかぶらなくていいルールなのです。

○事務局（藤本環境計画課主査） あくまでも札幌市内で離着陸する飛行機の燃料になりますので、新千歳などの分は入っておりません。

○小林会長 このように、私どもの生活そのものでもっと出していることになるわけです。また、IPCCの第5次報告書が出ましたけれども、徹底した省エネをして、自然エネルギーを使い、かつ、CO₂を地下に突っ込むことを実施すれば原発なしでも何とかできるかもしれないという提案であります。

家庭、その他自動車から出ているCO₂を集めるわけにはいきませんので、製鉄所と発電所とセメント工場から出るCO₂を集めて圧力をかけて、液体にして、地下に突っ込めるという原理はわかるけれども、そんなことはお金がかかってできないというのが大方の判断であったわけです。しかし、そんなことを言っていられなくなり、国は大金を使って、苫小牧沖に実験設備をつくり、来年から出光興産の苫小牧製油所から出るCO₂を液化して3,000メートル地下に突っ込む実証実験をしようとして取り組んでいるわけです。

このように、日本でも国際的な約束を守り、温暖化を防いでいかなければならない時代ですので、エネルギーに対するお金はもっと高くなります。懐が痛めばシステムも行動も変わるのだらうと思いますけれども、それ以前に、市民の努力でもっとできないかということで、資料が出されたのだらうと思います。

概念図がありますけれども、協議会のテーマとしては、実践層を増やし、定着させるにはどうしたらいいかということです。皆さんからいろいろなアイデアを出していただきました。

資料2を見ますと、5人の委員が書いてくださいましたので、順にご説明していただいた上で、各委員からご発言をいただきたいと思います。

それでは、青木（善）委員からお願いいたします。

○青木（善）委員 公募委員の青木です。市民の立場で参加しております。

ブレインストーミングのような形で、思いつくまま書いてしまいました。

「1」はビジネス宿泊客です。

私もそうですが、出張することが多い方に着目して、節電、節水の取り組みが見えるような宿泊部屋を用意してみたらどうかということです。しかし、用意しただけだと、宿泊しただけで終わってしまいますので、継続して居心地がいいかどうかを味わいながら、ポイント交換などができればいいかと思います。例えば、枕はどうかと思っております。遊び心が多少あると気楽にできると思っております。誰が、どうやって、予算はということ、宿泊旅行会社やホテルに協力していただくことが適切かと思っております。

次に、ひとり暮らしの市民です。

札幌にはひとり暮らしの方が比較的多いということで、環境を話題とした催しを行って節電、節水、CO₂削減です。交流会と書いているのですが、今はやりの男女が集まって気楽にできるようなものはどうかと思っております。学生を意識づけするのに、ビールを飲みながら、その缶をどうするかという話題提供もいいのかと思っております。

次に、家族、親子です。

私は、中学校2年生の男の子、小学校3年生の女の子がいる4人家族です。非常に悩むことがあるのですが、土・日に車で動くと、1,200円ぐらいで駐車場が一日中使えるのです。どちらが環境にいいのかはわかりかねるところがあるのですが、公共交通機関で動くことができるような家族割引があると、環境問題を家族で考えるきっかけになるかと思いました。

次に、自動車通勤者です。

私も、自分のことを顧みたのですが、週に1度や2度、ヨーロッパでは実際にやっているのかもしれませんが、自動車を使わないで通勤すると得られる特典があります。パリでは、街中に入ってくる車を規制するため、偶数ナンバーと奇数ナンバーで強制的に規制をかけているものをテレビで見たことがあります。これをうまく使って、通勤をすると得られる特典をつくるということも手ではないかと思いました。

最後に、これが一番実践的かと思ったのですが、10年以上の前の冷蔵庫保有者に冷蔵庫購入を促進するキャンペーンです。

実際に取組をされているのですが、いま一つ、活用がうまく結びつけることができないのは何が原因なのかは、この後に皆さんでお話しされるのかと思っております。

簡単なことですが、2013年11月9日の日経プラスに、10年前の冷蔵庫を使っていると、新しいものと交換した場合、年間で1万2,000円ぐらいの節約になるのです。削減のことについては、3人家族用と示されている301リットルから400リットルのものを使っている場合、新しいものに取りかえると、40%の削減になるようです。4人用の401リットルから450リットルぐらいのものをを使うと、68%削減ということで、かなり大きな数字が削減されるようです。

この辺は、私の両親もそうですが、主婦の立場だとお金が出てくるとイメージしやすいのですが、実際に後押しする冷蔵庫の買い替えはなかなか難しいのかと思っております。

ます。そこで、これをうまくキャンペーンに乗せられればと思います。

また、なぜ節電ができるのかに関しましては、根拠がきちんとありますが、それが意外と知られていません。一つは、インバーターの効果が格段にアップして、性能がアップしたのです。具体的に言いますと、冷え具合に応じて冷却能力を抑制します。これは、コンプレッサの性能が上がったことによるものです。二つ目は、自動省エネ運転が組み込まれているようです。パソコン制御が先行しており、プログラミングの中でできております。三つ目は、断熱材の効果が格段にアップしています。これは、インターネットや新聞や雑誌などでよく目にするのですが、場当たりのその場だけで紹介されているため、全体の知識としては、魅力と同じように、訴えられ方が十分ではないのかと思いました。

冷蔵庫に関しては、頭を悩ませるところかと思いますが、実際に何かをできればと思います。24時間稼働している冷蔵庫ですから、間違いなく削減につながるのではないかと思います。

○小林会長 大変具体的にありがとうございました。

事務局から補足がありましたら、お願いいたします。

○事務局（高木環境計画課長） 今、青木（善）委員からご紹介をいただきましたように、札幌市では、今年度、冷蔵庫の買替キャンペーンを実施しておりまして、皆様には資料としてお配りしておりますので、まずは札幌市の事業の内容をご紹介させていただきながら、ご指摘等をいただければと思います。

○事務局（日當エコエネルギー普及推進課長） 事業を担当しておりますエコエネルギー普及推進課の日當です。よろしくお願いいたします。

タイミングよく、今年からこの事業をさせていただいておりますので、この時間をおかりして、事業の紹介をさせていただきたいと思います。

皆さんのお手元の資料に省エネ型冷蔵庫買替キャンペーンというパンフレット兼申込書になっているものがあるかと思います。

なぜ冷蔵庫かといいますと、今、青木（善）委員からお話がありましたように、24時間365日使っているものでございます。夏冬で割合が違うのですけれども、家庭では、照明が電気を一番使っております。そして、2番目が冷蔵庫で、2割程度の電力を消費しております。また、24時間365日使っておりまして、照明と違い、消そうというわけにはいかないものですから、ここでの省エネが効果的ではないかと考え、ことしからこういったキャンペーンをやっております。

開いていただき、左側には対象者がございます。札幌市民の方で、みずから居住する札幌市内の住宅の冷蔵庫を買い替える方ということで、事業所の冷蔵庫は除いており、住宅の家庭用の冷蔵庫としております。札幌市内の店舗で対象の冷蔵庫を購入する方、また、2014年4月1日以降の対象の冷蔵庫を購入した方としております。

また、冷蔵庫にも条件がございます。対象は、統一省エネラベル四つ星以上です。表紙の左下に統一省エネラベルの見本が書かれておりますけれども、そこに表示されている星

の数が四つ以上であることです。星の数は省エネの性能をあらわしており、四つ星以上であることで、省エネ基準の達成率が165%以上となります。これは、先ほど青木（善）委員からお話がありましたように、4割以上の電力が削減できることになっております。それから、当然、未使用品であることとなっております。

申し込み方法は、領収書の原本と家電リサイクル券排出者控えのコピーを出していただきます。家電リサイクルの排出者控えは、買い替えであることを証明するための書類でございます。これを提出していただいた方に対して、札幌市から地域商品券をお渡しさせていただきます。

地域商品券は、札幌市内の地域で使用することのできる券でございます。ここに見本がございます。これは1,000円ですけれども、5枚お渡しいたします。これは見本ですが、実際のものは、六角形のマークがホログラムになっていて、偽造防止となっております。

この事業は6月1日から申し込みを受け付けており、締め切りが9月30日までです。また、地域商品券の使用期限は2月28日までとさせていただきます。地域商品券が使える商店は、地域商品券を贈らせていただいたときに同封しております利用可能店舗一覧でお知らせしたいと思います。また、対象となります商店はステッカーで表示することになっております。

また、青木（善）委員からお話ございましたけれども、冷蔵庫は技術が進歩しております。省エネが年々進んでおります。私どもの予想では、1軒当たり年間で約260キロワット・アワーぐらいの省エネになるのではないかと考えております。これは、1軒当たりの電気の消費量が3,000キロワット・アワーちょっとだと思いますので、約8%程度の省エネが達成できるのではないかと考えております。

そして、家庭の電気260キロワット・アワーで6,500円ぐらいの省エネになるのではないかと考えておりますので、青木（善）委員から提案がございましたように、1年間の消費電力量と同じ額の地域商品券をお渡しできると考えております。

当然、ご提案にもございましたように、ヨドバシカメラやビッグカメラや100満ボルト、ヤマダ電機などの地域の家電量販店、また、地域のまちなかの電気屋の組合とも協力いたしまして、パンフレットやポスターを置いていただき、中には、商店みずからつくったポスターで宣伝していただいておりますが、このような形で事業を進めているところでございます。

6月1日から受け付けを開始して、先着1万名様ですが、1カ月たちまして申し込みが1,000件ちょっとですので、まだまだ余裕がございます。もし買いかえを検討されている方が周りにいらっしゃいましたら、ぜひともお勧め願いたいと考えております。

簡単ではございますけれども、事業の紹介とさせていただきます。

○小林会長 ありがとうございます。

青木（善）委員から追加されることは何かありますか。

○青木（善）委員 私の住む町内会の取り組みの中で、見逃していたのかもしれませんがけれども、回覧では見た記憶はありません。回覧板は、ご年配の方は端から端までしっかり見られますので、その辺がポイントになるような気がします。

○小林会長 先ほど、五つの対象別にご自分の経験をもとにご提案くださった中で、冷蔵庫についての市での取組についてご案内をいただきました。

次に、大野委員からお願いいたします。

○大野委員 イオン北海道の大野と申します。

イオングループは、地球温暖化防止の取り組みは三つあります。一つ目は店舗の取り組み、二つ目は商品の取り組み、三つ目はお客さまとともにということです。今日は、その中の商品について触れますが、地産地消の取組をしております。

具体的には、第3土曜日、日曜日はイオン道産デーを活発にしていこうということで、その強化策に、イオンのエコ農業体験プロジェクトがございます。こちらは、私どものプライベートブランド商品でトップバリュがあるのですけれども、野菜農産物の農家を訪ねて、お話をいろいろと聞き、収穫体験をする取組でございます。

20組40名の親子に参加していただくわけでございますけれども、今回は北見でやったわけでございます。北見は畑だらけでございますので、当然、ジャガイモの収穫等は何度もしているのかと思ったのですけれども、20名の小学生に聞いてみると、初めてで、非常に楽しみですということでした。

農家の方が大型機械を使って大きなジャガイモを掘り出してくれて、お父さんやお母さんはそちらの収穫に一生懸命ですけれども、子どもたちは、そちらへ行かず、手で一生懸命掘っているのです。そういう楽しんでいる様子を見まして、実際に農家の現場に行くことが大事なのだらうと思いました。

ですから、地産地消、北海道にはおいしいものがたくさんあると言うだけではなく、実際に行って、収穫し、食べてみて、農家の社長の非常に熱き思いを聞いてくるのが大事なのだと思いました。コープさっぽろも「畑でレストラン」という事業をやられていると思うのですけれども、そのようなことも大事かと思いました。

二つ目は、来週、イオングループを挙げて防災訓練をいたします。グループの本社は幕張にあるのですけれども、そこやマックスバリュの本社とイオン北海道の本社をつなぎ、テレビで対応したり、FM北海道を使ってやるという大がかりなものです。

そこで、北海道の総務部にお話を聞いたところ、新たな防災教育を考えているということでした。来週にするような防災訓練は、意識の高い人がやるのですけれども、意識の低い人がやる防災訓練や防災教育が実は大事なのだと思っておりますということで、北海道では、去年から私どもの店を使っております。なぜ私どもの店かということ、もちろん防災意識の高い人も買い物に来ているのだと思うのですけれども、お客様の中には、意識の低い人や中間の人などいろいろな方がいるだろうということで、そういう方に気づいていただくということで、イオンの催事場で防災教育をやっていききたいというお話でした。ただ、防災

教育ではなく、環境教育と変えたならば、環境に関して意識の低い人も高い人も来ていますので、ショッピングセンターのお客様を対象に環境教育をすることも一つかと思いました。

例えば、以前、市長が私どもの店をジャックしたことがありました。ポスターを張れるような畳大のボードが入り口にあり、そこも市長、販促物には全て市長の顔が入っていて、私どもの店の販促物を使わないということをやったことがあるのです。そのようなことも繰り返すことが良いのだらうと思いました。

○小林会長 どうもありがとうございました。

事務局から何かありますか。

○事務局（高木環境計画課長） 発寒店には、節電の関係などでいろいろとお世話になりました。

また、後ほどお話が出ますけれども、エコドライブを普及するためには、ここに書かれておりますが、関心の薄いお買い物客など、環境目的で来ているわけではない方に啓発するための連携をお願いしているところです。

○小林会長 そのほうが大多数なのですね。そういうピラミッドの底辺の方々にいかに気づいていただき、行動につなげていただくかがきょうの趣旨ですので、ありがとうございました。

続いて、小田委員、お願いいたします。

○小田委員 こんにちは。公募委員の小田でございます。

前回の会議は欠席しましたので、藤本主査より藤野地区連合町内会での節電の取組について経過報告をしていただきました。内容の詳細については、会議の議事録にも記載されておりましたので、ポイントだけを説明して、これからどのような取組をしていくかについてご報告させていただきます。

当初、町内会連合会における取組について、対象が非常に大きなものであり、どこから切り込んでいったらいいかを悩んでいたのですけれども、環境計画課の方やまちセンの所長からの助言がありまして、進めることができしております。

取組の内容は、三つのステージを考えました。

第1ステージは、私個人でどれだけできるかということで、まずは、見える化機器を借り受けまして、自宅で節電の取組を実施しました。それをもとに、町連の役員に経過内容を報告し、非常にいいことだとPRしながら、第2ステージとして、町連の役員の方に取組をお願いして、実施いたしました。その結果は前回報告があったと思いますけれども、極めて良好でありまして、全員が前年の同月比と比較して消費電力量が少なく、金銭的にも安くなった結果が出ました。こういった内容が口コミ等により役員の中に広まっていき、第3ステージとして、藤野地区町内会連合会にどれだけPRして、実践していただけるかということを検討して、助言を受けて、後でご説明いたしますけれども、ステップアップいたしました。

平成25年10月に8人の役員に見える化機器を活用して実施し、よい結果が出ました。町連の理事会、そして、平成26年度総会が5月にございまして、総会の中で町内会連合会の事業計画の中に織り込んでいただき、町内会挙げて節電をやりましょうと提案があり、承認され、新しい計画へと進み出したところをございます。

第3ステージは、まず、見える化機器、省エネについてどんなものがあるか、総会で決まったことについてご説明しました。また、事業の一環としてスタートしますということで、チラシも作成いたしました。

また、8人の役員の取り組みと結果を一面にいたしまして、これによって省エネに協力できるということで、札幌市、まちセンとの協働で、藤野地区環境に優しいまちづくり推進事業をスタートいたしました。

6月の初めに回覧で各町内会に配付し、ついこの間の6月26日には、長岡委員に来ていただきまして、環境問題等について説明していただきました。そして、参加していただける方を募集しましたところ、19の単町があり、世帯数が6,707あるのですけれども、その中から53名の方に手を挙げていただきました。そのうち、説明会には43名の方に出席していただき、環境計画課の職員の方からわかりやすく説明していただきましたし、私も体験した関係で、何かお手伝いするようなことがあればということで話をいたしました。

その中で、各参加者の方から質問等があったのですけれども、電気についての認識がなく、分電盤に取りつけるときの危険度、また、大抵の分電盤は玄関やトイレの上の高いところにあり、コンセントを引くことになるのですけれども、そこまで引く方法など、コードがなければできないのではないかなど、取り組みづらいということもございました。それについては、みんなで話し合っ、つけられない場合、あるいは、何かがあったら連絡してもらえれば応援しますということで話を進めております。

つい昨日、今日あたりに資料が届き、目標数値を記入して進めることにしておりますが、7月末から1カ月間の予定で進めようということで取り組んでおります。

○小林会長 どうもありがとうございました。

事務局から説明がありましたら、お願いいたします。

○事務局（高木環境計画課長） 今、小田委員から触れていただきましたけれども、藤野地区に投げかけさせていただきました札幌市の事業について、担当課よりご説明させていただきます。

○事務局（山本推進係長） 環境計画課の山本と言います。どうぞよろしくお願いいたします。

皆様にお配りしておりますチラシのセットがございます。こちらを1枚めくっていただいて、2枚目のブルーのチラシが見える化機器貸し出し事業のチラシになります。

今回、藤野地区の皆様にはこちらに取り組んでいただくことになっているのですけれども、右上に昨年の実績が載っておりまして、約8割の方がこれを利用することにより節電

が達成され、平均削減率は約13%と結構高い削減率になったと考えております。

もう2枚めくっていただき、黄色いチラシがございまして、こちらが節電・省エネキャンペーンです。

藤野地区の皆様には、先ほど見える化機器の貸し出しと一緒にこちらにも取り組んでいただくことになります。見える化機器を使って節電に取り組んでいただいた後、電気料を削減できた方には企業協賛の記念品を贈呈いたします。

これまでは、電気使用料だけを教えていただきましたけれども、省エネキャンペーンでは、今年からはガスや灯油の料金も報告していただき、前年から削減できた方には抽せんで記念品を贈呈することにしております。

また、一つ前に、「家庭の省エネ診断でライフスタイルを見直しませんか？」というチラシがあります。こちらは、藤野地区の皆様への必須ではなく、希望者に受けていただくということで、今、希望をとっている段階です。希望者がいらっしゃいましたら、こちらから藤野のまちづくりセンターにお伺いして、実際に診断する流れになります。

こちらを受けていただいた方の昨年度の実績は、真ん中に載っておりますとおり、診断前と診断後ではエネルギー削減率が14.8%、年間の節約金額は約6万円となっております。

事業の説明は、以上になります。

○小林会長 どうもありがとうございました。

数年前は、電力ピーク時を停電なしにいかにかり切るのがメインでしたけれども、原発なしでもいけるのだとわかった今は、節電だけではなく、自動車や交通機関などの全てを含めて、大量消費、大量廃棄という構造の中、製造過程でもエネルギーを大量に使っていることから言うと、暮らしや価値観そのものを見直そうということに焦点が移ってきました。

今、小田委員からご説明がありましたように、都心部の人に比べ、郊外にお住まいの人は除雪の問題その他で協力しなければ生活していけないので、案外まとまりがいろいろだと思います。しかし、あくまでも自発的に省エネに取り組んでいただけるような意識形成を地域ぐるみで考えておられるのでしょうか。いろいろなグループで意識形成を図っていただきたいということですので、残りの時間で皆さんにはご議論をいただきたいと思っております。

次に、武田委員、お願いいたします。

○武田委員 昔から宿題が大嫌いで、どうしようかと思ったのですけれども、何かを書いておけば皆さんが何かを思い出すきっかけになるのかと思って書いてみました。何をしたら環境配慮なのかを理解していない人は結構いるわけです。こういうところで意見を述べられる方は環境に対して詳しい人が多いのですけれども、ふだんの何気ない行動が環境配慮になっていることが多々あると思います。

当社は、トラック協会だけではなく、武田運輸として言いますと、ドライバーでも省エ

ネ低燃費運転と言われますけれども、どうすればいいのかということがあります。結論から言いますと、楽しみながら、結果的に環境に配慮しているのだというところまで持っていければいいと思います。こうすれば環境配慮になる、こうすれば低燃費になるということはありませんけれども、知らないうちになっていけば一番いいと思います。みんながみんな、考えて行動する人ばかりではありませんので、そういうシステムをつくっておくことも一つかという気がいたします。

また、安易にマイカーを利用する人たちです。前から言っているのですけれども、隣に行くだけでも車に乗らなかつたら気が済まない人もいるのです。若い人たちでは免許取得者が少なくなってきたり、車離れがあつて、我々業界はそれを一番危惧しています。また、運送会社に行く青年がいなくなってきたりしているわけです。昔ですと、履歴書には、趣味にドライブと必ず書かれてあつたのですけれども、今は、そういう人は誰もいなくて、パソコンかゲームです。

そして、自衛隊の方も採用するのですけれども、自衛隊の輸送隊の人も車に乗るのは嫌だと言うので、いろいろと問題になっています。また、車から離れていき、確かに公共機関を利用することで交通事故が減りますので、乗らないのが一番いいのです。ただ、これはマイカーに限ってであつて、やはり営業車は走らなければなりません。

また、前に言いましたけれども、営業車両の札幌市内の繁華街への荷物の納入についてのことです。時間を決めての搬入やエンジンをアイドリングしたままでの搬入はやめてもらわなければなりません。もっと言いますと、天然ガス車です。また、環境車は荷さばきができるようにしています。今、札幌市では荷さばき場をつくっていただいておりますけれども、まだ足りないのが現状です。それは一般車両が入ってくるから足りなくなってくるからで、環境車だけにすることによつてもっとスムーズに行くのではないかという気がいたします。

○小林会長 ありがとうございます。

武田運輸では全社を挙げてエコドライブを進められており、国土交通大臣表彰を受けておられますが、本当におめでとうございます。

車両の買い方や使い方など、いろいろとご指導をされているのですね。

ご紹介くださることは何かありますか。

○武田委員 昨年、国土交通大臣賞をいただきました。交通関係の環境保全の優良事業者ということで、日本で5団体です。運送会社は私どもだけで、神戸製鋼や埼玉市もいただいております。札幌市がないのは寂しかったですけれども、いずれはいただけるのかという気がいたします。

当社は、平成11年から天然ガス車両を導入しております。天然ガス車両を買ったから領収書がわりに大臣賞をもらったわけではありません。その間に、ハイブリッド車、CNG車、BDF車を導入しております。当社の車両保有台数は約80台ですけれども、そのうちの16%が環境車となります。平成17年には、エコドライブコンテスト札幌地区大

会で優秀賞をいただきました。

また、CNGの話になりましたけれども、苫小牧勇弘でガスがとれておりましたが、ここ3年で枯渇して、当初は地産地消としていたのですがけれども、今は輸入ガスを使っておりますけれども、ガスの単価が非常に安かったのです。

取り組みが不純で、環境にいいからガスを使ったのではなくて、運行費が安いからです。しかし、車両は非常に高い値段で、ありとあらゆる補助金を酷使して、導入しております。

そして、平成18年に500キロメートル走行可能な車両をメーカーと共同開発して、札幌―旭川間を運行していましたが、あっという間に老朽化してしまい、新しい車両を導入しなければなりませんでした。しかし、500キロメートルでは足りないわけです。というのは、ガスの充填所は、札幌、石狩、旭川にしかなく、道東方面を運行するために、少なくとも700キロメートル以上の運行ができる車両をつくらなければならないということで、平成24年にいすゞ自動車と共同でガスボンベ5本を増設した日本で初めての800キロメートルを走行できる車両を導入いたしました。

超長距離型であり、特殊車両で、世界に一台しかない車です。私は宇宙に一台と盛りつけて言っているのですけれども、こういう車両を運行させております。

この超長距離型天然ガス自動車については資料があります。この車両のため、日本各地より見学に来ていますし、最近ではロシアからも視察に訪れてきています。ここに書いておりますけれども、対象車両は、「札幌800 あ 5733」で、ディーゼル車です。800キロメートル走る走行車両は「札幌830 う 800」で、私は「うそ八百」と言っております。本当は700にしようとしたのですけれども、実際には800キロメートル走ったので、急遽、ナンバープレートを変えました。車両には、東区のイメージキャラクターのタッピーを横に張っております。

1日当たりの走行距離は360キロメートルで、札幌―旭川間を毎日往復しております。364日でして、1日足りないだろうということですが、その1日は車検でとまります。人は休みますけれども、車は動きます。また、函館や帯広も射程距離に入っております。

平均燃費はディーゼルよりもガスのほうがよくありません。排出CO₂は、ディーゼル車は156.4キログラムで、CNG車は142.7キログラムです。これはぱっとわからないのですけれども、牛乳パックでは6,850本だと言うと、何となくすごいという気がするのです。

このように、詳しい数字よりも、わかりやすい数字の出し方のほうがいいかと思っております。また、CO₂の吸収に必要な広葉樹は2.3本です。これは担当の者がつくって初めていいことをしているのだとわかった次第です。

○小林会長 ありがとうございます。

私の会社は大臣賞を受けたのだということで社員も家族も誇りを持ちます。これは、環境活動を定着させて実践に結びつくすばらしいことだと思います。運送会社としては、全国で1社が国土交通大臣表彰を受けたということで、本当におめでとうございます。

こういうふうに、すごいことをしている会社だと思えるような企業や町内会になることはすごく大事だと思います。

最後になりましたけれども、宮森委員、お願いいたします。

○宮森委員 私から簡単に説明させていただきます。

先ほど市から説明のありました資料1をみると、

「環境配慮活動に対する市民の意識」のところで、割合の高い回答は、「細かく気にするのは面倒」41.5%であり、18歳から39歳の若い世代をどのようにしたら実践層に持ち込めるかを考えてみました。

環境配慮活動実践層では、「小まめに取り組む」や「ひと手間かけて」という行動は、よくあることで、それも習慣化すればそんなに大変なことではないという話をするのですが、それが「面倒」ということですから、「エコ」イコール「面倒」というイメージから変えなければいけないのではないかと思い、キーワードを「楽（らく）エコ」としました。また、「楽（らく）」だけではなく、楽しく続けられることも一つの大きな目標ですので、「楽（たの）エコ」でもいいかと思えます。

関心はあるが環境の集まりや講座には出ない、市が省エネガイドの冊子を作成しても、開いて見る機会がない、知識として知っていてもすぐに実践しない、そういった層の方々を念頭におき、まずは、若い世代で構成するワーキンググループでアイデアを募り、アンケートをとって、どういうことなら楽にできるのか、その方たちに受け入れられるのかを調査します。そして、その世代の多くの人たちが所持しているスマホのアプリを製作し、省エネのステップを少しずつ踏んでいただくような形にしてはどうかと考えました。

情報提供だけではなく、自分の家のエネルギー使用量のデータが入力でき、平均値と比較して自分の立ち位置をリアルタイムに確認できるということも、ステップアップの機能として持たせられるといいと思います。さらに、省エネを実践するごとにキャラクターがバージョンアップするようなゲーム感覚も取り入れて、楽しく継続できるような工夫も必須ではないかと思っております。

○小林会長 ホワット、フー、ハウが今日の集まりのテーマでして、いい提案をしていただきました。

札幌市ではアプリを工夫されているのですか。

○事務局（高木環境計画課長） ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、今年度、ごみの分別アプリを出しました。実は、省エネについても宮森委員からご提案のあったアプリを活用した啓発ができないか、私どもも考えていたところでした。そういう意味では、宮森委員の思いが通じているのかと感じております。

そこで、現時点で事務局が考えている内容について、簡単にご説明させていただきたいと思えます。

○事務局（山本推進係長） 環境計画課の山本です。

現時点の事務局案について簡単にご説明したいと思えます。

宮森委員からご提案がありましたけれども、私たちも、節電や省エネに関心が薄いと思われる若い世代をターゲットに何かできないかを考えました。アプリ機能として私どもが考えていたことは、宮森委員と重複している部分もありますけれども、電気や灯油、ガス、水道、ガソリンなどの使用量を利用者が入力できます。これらのデータを吸い上げて、利用者にフィードバックして、アプリの利用者の平均値と比較できるようにします。節電金額の目標値を設定して、取り組み内容をチェックすることで、節約金額の目安とすることができます。あとは、日々の取り組みのワンポイントアドバイスが受けられるようにすること、また、宮森委員もおっしゃったようなゲーム感覚で省エネクイズなどがあるということ、暖房やロードヒーティングなど、積雪寒冷地にも対応した内容とすること、そのほか、市の各種節電・省エネ事業もそのアプリから得られるようにすること、このような機能を考えていたところでございます。

○小林会長 今、宮本委員がアプリを持っているそうですが、環境情報のプロから説明してください。そして、大熊委員は若いので、アプリを使う世代としてご意見があればお願いいたします。

○宮本委員 今、この場で検索して、インストールしているところで、中身を開いておりません。これが終わるころにはインストールが終わると思います。

○大熊委員 みんなもアプリでゲームなどは結構やるのですけれども、それがコミュニケーションの一環になっているのです。今は、ネットでつながって、友達と一緒にゲームができるので、それをやっていないと友達とは仲よくなれないです。それをうまく使い、環境をやっていないと友達になれないところまでつながっていくかもしれないと思います。また、若者が食いつく機能や若者にわかりやすくということかと思えます。

○小林会長 楽しくなければ続かないのは問題ですけれども、真実ですね。やっているうちに習性になって、当たり前になってくればいいですね。また、宮森委員が言われたように、「らくエコ」と「たのエコ」と仮名を振ればいいですね。五、六年前に宮森委員が編集にかかわったどういう行動をしたらいいかという「エコでとくをする」は、理解の「解」と「得をする」の「得」で「エコとくガイド」というものがありました。キャッチフレーズは、言いやすく、簡単で、意味が通じることも必要で大事だと思いますが、いろいろな提案をしていただきました。ハウ、ホワット、フーなどを皆さんに考えていただきました。

時間になってしまったのですけれども、特にご発言をくださる方はいらっしゃいますか。

○照井委員 先ほどからアプリの話が出ておりましたけれども、ふだん、私はLINEを使っており、今月の電気代はこうだなど、友達のグループの中でそういうことを見せ合っています。今、私が一番欲しいのは、スマホはすごく電気がかかるので、小さなソーラーのボタンがついているといいかと思えます。

○小林会長 宮本委員のリュックにもついていますよ。

○照井委員 スマホについていればとても助かると思います。

また、ポイントがよく言われていますけれども、ポイントを集めても、欲しくないもの

が結構あるのです。ですから、ポイントを集めて欲しいものがあつたらいいと思います。
○小林会長 武田委員がトラックを発注したように、ニーズがあれば、商品はつくられます。それがだんだんと広がっていけばいいのだと思いました。

それでは、村上委員、お願いいたします。

○村上委員 コープさっぽろも環境の取り組みをしていて、今後、どうしたらいいかという悩みがありまして、そのうちの今日になってしまいました。やはり、大震災後、環境の取り組みが今までとはちょっと違うものになってきています。二酸化炭素の削減を考えていくと、札幌市の報告にもありましたように、数字で見えていくと非常に絶望的ですがけれども、地球全体で環境の取り組みをしていかなければならず、生物多様性という大きな枠の中で考え、それに組み込んでいく中に環境の取り組みがいっぱい入っているとしようがいいのかなどという思いがありました。

また、中間層の人を底上げしていくという意味では、環境に対して熱心な人たちを動かさない限りは動いていかないと思いますので、全体的な機運をつくっていかねばならないと思っていました。

わかりやすく言えば、3本の矢のように、大野委員が言われたような農業体験です。私も冷蔵庫を買いかえるか、屋根を直すかを悩んでいたのですが、冷蔵庫を買い替えようと思いました。このように、いろいろな方面で同時に機運を盛り上げていくことが必要かと思いました。

例としては、イオンやCGCの方々とレジ袋の有料化によるマイバッグ運動を五、六年前にいたしました。今や、北海道で買い物をすると、お金を払わないとレジ袋がもらえないことが当たり前になっていますけれども、全国的にはまだそうではありません。ですから、私たちは、知らず知らずにレジ袋を減らしています。市ではごみが減っておりますし、私たちはコストを削減することができましたし、それでいろいろな企業が植樹などの環境活動をしています。これは、行政と民間と市民団体が一緒になってやったことだと思います。せっかくの場なので、そういったものをしていったらいいのではないかと思いました。

また、コープさっぽろは、来年50周年を迎えます。内部の論議の中で、50年後はどんな世界になっているだろうという問いがありました。今の子どもたちは、2020年や30年には大人になっていますので、どんな未来を描くのかという投げかけを子どもたちにして、絵などを募集して掲示するなど、よくある取り組みではあるのですが、全体でやることによって何か生まれないかと思いました。

○小林会長 ありがとうございます。

予定の3時半になり、ご予約のある方もおられると思いますので、終わりたいと思いますが、お帰りになる方にはお帰りいただいて、続けていいですか。

○市村委員 資料1を見ると、2の(1)で気になりますのは、18歳から39歳までの41.5%の方が面倒だと言っているということです。また、どうすればということで、メリットがわかればという回答が同じ年代で22.3%、さらに、環境配慮ということで、

光熱水費を削減するためという回答が34%です。ここで得られるキーワードは、評価の仕方だと僕は思いました。

評価に関していろいろな提案があるのですが、時間がありませんから、札幌市がやるべきことを2点だけお話しいたします。

一つは、スマートメーターの普及に力を入れてもらうことです。これは、北電がやることですから、企業となりますけれども、支援ができないのか。聞くところによると、一部で始めていますけれども、10年はかかると言っています。道や国ともうまく連携をとりながら早める方法がないのかということです。これは、見える化や省エネに大変効果が出てきます。住宅も企業もみんなそうです。ですから、見える化のための一つの手として、スマートメーターの普及にぜひ力を入れていただきたいと思います。

二つ目は、新規施設です。住宅やマンション、事務所、工場、場合によっては公共施設もありますけれども、そこに対する省エネのシステムがかなり確立しております。断熱性能では、窓にしても、ガラスを3枚にしたりペアガラスを二重にしたりすることによって、どれだけの熱量を損失するかという評価が非常にきちんとしていますので、新規住宅については、行政指導で高断熱、省エネの住宅、事務所、マンションについてがっちりと枠をはめてほしいと思います。

○小林会長 ありがとうございます。

今日は、建築家協会のご出席はないですけれども、住宅金融公庫の融資基準その他で今おっしゃられたようなことが財政支援のもとに着々と進んでいるだろうと思います。

それでは、太田副会長からお願いいたします。

○太田副会長 ただ単に環境配慮をどうしましょうかと言われても、なかなか出てこないのですが、今日の会議では具体的に出していただきました。さらに、メリットがないと市民も動かないのです。精神論的にはいいけれども、実行はなかなかということになる。その人にとってどういうメリットがあるかも重要だと思います。そういう状況でようやく具体的に動き出すのだと思います。今日お聞きしていて、青木（善）委員のお話には具体的なメリットが書いてあり、非常にいいと思いました。また、武田委員のお話も具体的なお話でいいと思いました。

なお、青木（善）委員のお話で、省エネ性能が優れている5万円以上の冷蔵庫を購入すればということですが、冷蔵庫はどのぐらいの金額ですか。というのは、余り高いと、買えないということが起きてくるのです。特に、私たちのように年金生活者になると、省エネ性能が優れているのはわかるけれども、現在のものをもう少し使おうとなるので、その点を教えてください。

○事務局（日當エコエネルギー普及推進課長） 先ほど1,000件以上の申し込みがあったと紹介させていただきましたが、統計をとらせていただきますと、平均で16万6,000円ぐらいとなっております。四つ星と五つ星がありまして、四つ星以上と指定しているのですけれども、四つ星のもので13%、五つ星のもので87%で、性能のいい五つ

星のものを圧倒的に購入されているようですので、ひとつご検討ください。

○太田副会長 それから、公共交通での家族割サービスについて青木（善）委員がおっしゃっていて、私はいいと思いました。また、武田委員からもマイカー利用を減らすために付加サービスをつけるということがありました。札幌市では、地下鉄もバスも赤字なのはわかっているのですけれども、もう少し具体的に考えられないかと思いますが。

○事務局（高木環境計画課長） 地下鉄、バスはご存じのとおり、家族割などはありません。割引ではないのですけれども、電車は、どサンコパスがあり、土・日・祝日に300円出すとフリーパスが買えます。それは、大人1人と子ども1人が1枚で乗れるという家族セットで使えるものは行っております。ただ、今はSAPICAの普及に一生懸命で、今後、地下鉄でそういうことをやっていく予定はありません。

○小林会長 ドイツでは、レギオカルテと言って、祭日には周辺の交通機関全部を家族で乗れるものがあります。しかし、日本では独立採算性で都市の公共交通をやっているため、西洋とは予算のシステムが違うので、そっくり導入はできないのですけれども、省エネ費用で一般会計から入れることはできないことではありません。しかし、どうやって家族と認定するか、チョンボをいかに防ぐかには相当難しい問題があるかと思いますが。

しかし、冷蔵庫についても、今は、700リットルや800リットルを売り物にしているメーカーもありますが、そんなものが本当に要るのかです。要は、家庭の電気使用量がふえたのは、2台目、3台目、4台目の大型化が問題でした。学生が友人宅を調べたデータでは、家族が減ったので小さいものに買い替えた例は1件しかありませんでした。家、車、冷蔵庫、テレビを小さくすることは相当有効ですけれども、それがなかなかアピールされていないのは問題かと思いますが。

まだまだご意見を述べたい方が多いと思いますけれども、次のご予定がある方もいるかと思いますが、ここで終わりにしたいと思います。

お家にお帰りの後、有効に機能させるためにこんな工夫をしたらいいのでは？など思いついたことがあればメールや電話で事務局にお伝えいただきたいと思います。

また、冒頭に事務局からお話ししましたように、今年度末に札幌市での新たな温暖化対策の実行計画をつくらうとして環境審議会などで進めておりますので、ご協力をいただきたいと思います。

今日は、時間を押していますので、ここで終わりにしたいと思います。

それでは、最後に事務局からお願いいたします。

○事務局（布目計画係長） 環境計画課の布目でございます。

事務局の会議の時間設定の考えが甘く、大変ご迷惑をおかけして申し訳ありません。ご意見を言い足りなかったり、今日ご提案いただいた内容をきっかけに新たな発想もあろうかと思いますが、今、小林会長からおっしゃっていただきましたように、事務局にいつでもご意見をお寄せいただければと思います。

次回の会議は、秋以降を考えております。冒頭でもご説明させていただきましたように、

新たな実行計画を策定する中で、効果的な環境配慮行動の実践への誘導ということで、今日いただいたご意見を反映させることを検討していきたいと思います。場合によっては、次回会議の前に皆様に情報提供やご報告、ご相談のためにご連絡を差し上げることもあろうかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

3. 閉 会

○小林会長 今日、時間をオーバーしましたが、熱心にご議論をいただき、ありがとうございました。

どうぞ、メールや電話で事務局にご意見を寄せてください。

今日は、遅くまで、どうもありがとうございました。

以 上